

実践報告 (Report)

「ふれあい実習Ⅱ (参加)」の実践報告

—教員養成と現職教育のための“ハイブリッド型教育実習”構築を目指して—

Report of “Chalk face Seminar II: training to
be teachers at elementary school”:
Investigation into a hybrid system of training
of teachers and training to be teachers

山田 真紀
Maki Yamada*

はじめに

本稿は椋山女学園大学教育学部の授業科目のひとつである「ふれあい実習Ⅱ (参加)」の実践記録である。「ふれあい実習Ⅱ (参加)」は1年次必修の「ふれあい実習Ⅰ (観察)」の上位科目であり、ふれあい実習Ⅰで授業観察の技能を身につけた後、希望者が椋山女学園大学附属小学校 (以下: 椋山小学校と略記) にて1年間、授業実習を行うものである。授業実習は、土曜日にクリプトメリアンサタデースクール¹に参加する小学生を対象に、年間15回程度行う。教育学部が開学した平成19年度から4年間は選択必修科目であり、平成23年度からは選択科目となっている。

筆者はこの授業科目を、将来教員を目指す学生の教員養成の場であるだけでなく、大学の教員と小学校教諭がともに学び合う現職教育の場としても位置づけている。そして将来的には、総合学園である椋山女学園ならではの“教員養成と現職教育のためのハイブリッド型教育実習”の構築を目指している。まだ道半ばではあるが、現時点での成果と今後の課題についてまとめ、今後のさらなる改善の一里塚としたい。

1. ふれあい実習Ⅱ (観察) の概要

(1) 歴史

①人間関係学部の教職履修者がボランティアで運営する時代

平成14年度に、当時の椋山小学校校長の中村太貴生先生と、人間関係学部講師であった筆者が、主に人間関係学部の教職履修者を対象にはじめた「椋山小学校ボランティア (通称: 椋ぼら)」がふれあい実習Ⅱ (観察) の前身である。平成14年度から18年度までの5年間は、授業の位置づけを持たない、筆者にとっても学生にとっても純粋なボランティア活動であった。

椋山小学校では、土曜日に「土曜講座」と呼ばれる講座を開いており、希望する児童が英語・パソコン・三味線・フラダンス・造形絵画などの講座に参加していた。これらの講座受講に先立ち、児童の基礎学力向上を図る目的で「学習タイム」が設けられ、

* 椋山女学園大学教育学部

この時間を担当する講師として大学生が招かれたのである。学習タイムは8時45分から9時30分の45分間であり、前半に算数ドリルを行い、後半に学生が準備した自主教材を行うという構成となっていた。教職履修者の実践力向上の場として、また同じ総合学園で学ぶ小学生と大学生の交流の場として機能することが期待され、実際に、この活動を通して教職の魅力に目覚め、現在、小学校教諭や中学校教諭として教壇に立っている卒業生も多数輩出している。一方で、人間関係学部では小学校教諭の免許状が取得できないため、この実習を通して小学校教諭になることを志しても、卒業後に通信制大学に再入学しなければ免許状が取得できないことから、卒業後に特別な苦勞をして小学校教諭になった卒業生が少なくないこと、また純粋なボランティアであったため、学生のモチベーションを高く維持するのが難しく、時に学習タイムの後半の自習教材が、椅子取りゲームやドッジボールなどのレクリエーションになってしまうなどの課題も抱えていた。

②教育学部開設前の広報用授業として整備された時代

平成19年度に教育学部が開設されることになり、「栢ぼら」は「ふれあい実習Ⅱ（参加）」という科目としてカリキュラムに位置づけられることになった。新しく開設される学部は、まだ実態や成果がないなかで世間にむけてその存在をPRしていかなければならないという難しい課題を抱えるものである。こうした背景のもと、平成18年度には、「栢ぼら」に教育学部進学を希望する高校生を招き、実戦力育成を重視する教育学部の授業に触れてもらおうという企画が始まった。平成18年度には、8時20分から40分まで朝の会、8時45分から9時30分まで授業実習、9時40分から10時30分まで討論会というふれあい実習Ⅱ（参加）の構造ができあがった。この活動を担ってくれたのは、筆者が教職科目を担当する人間関係学部と生活科学部の学生であったが、学生たちはみな、この活動が新学部の広報活動としても機能しているという趣旨を理解し、かつ高校生の前で模範的な学生であらなければならないという自覚から、活動はこれまで以上に真摯なものになった。高校生は、小学生を指導する大学生の頼もしさ、小学生と触れあえる楽しさに触れることができ、また授業実習後に展開される討論会での活発な議論にも触発されたようである。この企画に参加した多くの高校生が教育学部を受験してくれ、この企画は成功裡に終了した。

③教育学部のふれあい実習Ⅱ（参加）の授業へ

平成19年度から授業化されたことにより、活動に「栢ぼら授業報告シート」と「栢ぼら巡回指導カード」が加わった。

「栢ぼら授業報告シート」の現物は資料1に示したものである。これは自分の行った授業と、準備した自習教材の効果について振り返り、その記録を文書にとどめ、蓄積するための仕組みである。1学期は、授業担当者がすべての授業報告シートに目を通し、コメントを記入し、学生に返却するが、2学期以降は、コメント係ローテーシ

相ボラ授業報告シート (改訂版)

授業日 H23 年 10 月 8 日 クラス 5 年生

授業者名 福田 晴菜

山盛

本時のねらい・目標

① わからないところを、そのままにせず、わかるようにする！
大々なことだね！

授業の流れ

	《授業者の動き》	《児童の動き》
始業前	・ 高校生と一緒に教室へ向かい、始める準備をする。 ・ <u>机を配るよう児童に伝える。</u>	・ 高校生の登場を気にかけるが、担任の先生がいたため、そちらに集まる。 ・ 「座席を変えてほしい」「指定席はやだ」と言いながら、机を机の上に置いていく。
0 分	・ 座席について文句を言う子どもには、「決めたことだから」と説明する。 ・ <u>号令係を指名する。</u> とても良いと思います。	・ 机の上に置いてある荷物をロッカーに片付ける。 ・ 「本当はここが私の席なのに……」と言いはから重々しくしない。
5 分	・ 指定席と違う席に座っている児童に対して、指定した席に戻るよう言う。 ・ 戻ろうとしない児童に対し、「みんな決められた席に座っているのだから戻りましょう」と伝える。	・ 周りの反応を見ながら指定席に戻る。甘えている児童の対応は難しいですね。
10 分	・ ドリルを配り出し、それぞれの児童の進捗を確認する。(口々に言われると困るため、指定した児童に聞く)	・ 「○○ページの△△までやってある」「××ページが」とぼけてある」と答える。
15 分	・ <u>ドリルの範囲を指定し板書する。</u> ・ 机間指導をする。手が止まっている子やわからないところを とぼけて進めている子や答えが間違っている子に声を掛ける。	・ ドリルを始める。 ・ もう一度落着いて考えると、正しい答えは導き出すことができたことが多かった。
20 分	・ 指定した範囲を終えた子は前のページに戻り、それも全て終わった子にはテキストをやるように言う。	・ 自らわからない問題や、ある不安な問題を尋ねる。
25 分	・ <u>答え合わせをする時間</u> を伝える。	・ 答え合わせの時間に合わせてドリルを進めていく。
30 分	・ 答え合わせをしながら、全体的に出来の悪かった問題を全体に向けて解説する。 ・ 一方的に机間指導をするのではなく、「ここはどうなるでしょうか、○○さん」と机間指導の際に解説していた子に指導する。	・ 「全体的に出来が悪かった」と前置きして、この前向きに解説を聞くことができていた。
35 分	・ 自主教材を配り、説明をする。話の途中で質問をしようとする児童に対し、「 <u>全て説明が終わったら質問はしたさい</u> 」と伝える。良い対応だね。	・ 一度解説されたことを全体に向けて再度確認することで、理解を深めていた。
40 分	・ 自主教材の答え合わせをする。→板書	・ 途中で質問しようとしていた児童は最後まで説明を聞いた後には、質問をしなかった。
45 分	・ 次週の予定(持ち物)と、2時間目の注意事項を確認する。	・ 自主教材を解き、全員が出来たところまで一斉に答えを発表する。
放課	・ 号令係を指名する。 ・ 黒板を消し、教室の整理・電気・カーテンについて呼び掛ける。児童の話を聞く。	・ 板書を写す。 ・ 号令を掛ける。 ・ 電気を消し、カーテンを閉める。 ・ 教師に話し掛ける。

(表)

資料1 相ボラ授業報告シート

机間指導をする価値があって、とても良いと思います！

私も実習中は、どの子がどんな考え方をしているのか、自分の期待する答えを書いて
いる子は誰か、理解の遅い子の様子などに気づけて机間指導するよう、

工夫した点・うまくいった点

・算数ドリルを進める際、答え合わせをして終了、ではなく全体に向け解説を指導されました！
することにした。前回までは、全員の進捗を見て行う机間指導におもきをお
いていたが、今回は「どの子がどの問題でつまんでいるのか」「全体的にミスの多い問
題はどれか」「理解度の低い単元はどこか」など、普段とは異なる視点で
見て回ることができたため、個々に寄り添って指導することができた。
・勝ちに席を替えていた子に対し、一方的ではなく、児童の考えを正しながら適切な
対応ができた。

児童が納得することが大切ですね。

改善点

ポジティブな聞き方をすることが良いと思います。

・算数ドリルの解説を行う際、板書スペースを空けていたにもかかわらず、
口頭で説明してはった。→板書案も考え、事前にしっかりと準備しておく
必要がある。また、説明後に「わからなかった人」と聞くのではなく「わから
ない人」「少しわかった人」「もう1回説明してほしい人」「本当にわかっているか自信のない
人」などと言いかえながら、児童の理解度を把握できると良かった。
・自主教材（社会）の難易度が低く、児童が予想以上に早く答えを出してし
またため、難易度を高く設定すべきだった。また、下調べが不十分だったと感じた。

議論点とあなたの考え

＜席替えについて＞

2学期初回の授業で席替えをしたクラスが少なくあることから、このテーマを設定
することにした。席替えは、児童の気分転換のためだけでなく、毎日同じ席に
座ることによって姿勢や使う眼に偏りが出てしまうことから、必要であると思
う。また、教師側から子どもたちの様子（学級の雰囲気）などを見ていて、「改善が
必要である」という判断をした場合に「行われるべきであり、学級の在り方や
雰囲気意識的に操作する手段でもある」。

しかし、これらは毎日授業が行われる教室の中で「言えるものであり、相づちの
ように月に数回程度しか行われない場合では、席替えはあまり良い方法だ
とは思えない。夏休みが過ぎ、1学期に比べて少し成長している児童は、他人が
気になり、なかなか集中できない。また、運動会が終わり、中休み」の時期とも
言われる今回は更に集中が欠けてしまっていた。児童も私たちに「慣れなれぬ、以前よ
り強く自己主張をしようとする時期に席替えをしてしまうのは寧ろ逆効果とも思
われる。数少ない授業の中で何度も席替えをすると児童が混乱し、新しい席に
なることで注意が別の方向へ向かってしまうことから教師も新体制を整えるまでに時間を

席替えの方法
もいろいろ
考えておきたい
ですね。

要するため、相づちでは前向きな意見を持てない。私もそう思います！

次回の予定（次回までに準備するもの）

他学年は、より一層気持ちの切り替えが難しいと
思うので、席替えはしません。

あなた自身が作成した教材があれば添付してください。（クラスと名前を記入すること）

（裏）

ョンを決め、すべての学生が順番にコメント係を務めることができるようにしている。学生にとってピア集団からの刺激は授業担当者からの指導を上回る学習効果があるためである。授業担当者は全員分の授業報告シートの内容とコメントを確認し、採点したのち、学生へ返却する。

「椋ぼら巡回指導カード」の現物は資料2に示したものである。授業担当者は1回の授業で2クラスの授業を見学し、本票に記入して、学生にフィードバックする。受講者数が多い年度には、学生にも他のクラスを参観させ、同様の巡回指導カードに記入してもらい、授業を行った学生にフィードバックを行っていた。

椋ぼら巡回指導カード

参観授業 2 年 A 組 日時 2011 年 10 月 22 日 記入者: 山田真紀

◎ 良い点

- ・ タイムと同時に開始の挨拶が5人ともできていた。けじめのある授業は最初が肝心です。
- ・ 自主教材の内容が素晴らしいです! 椋小は千種区の中にあって、周辺に市役所や消防署などの重要な地図記号がたくさんありますね。立地を生き、それを巧みにしている点が良いと思います。
- ・ 算数ドリル、自主教材ともに時間を区切って作業させ、まだ終わっていない子にも、一旦作業を中断させて前に集中させたのが良かったです。

◎ 改善点

- ・ 自主教材に時間を確保したいために、ドリルの答え合わせや解説を行わずに集めてしまったこと。この問題はどのように解くのだろうか...という問題を識が落ちてしまて次回に解説としても効果が落ちるのでは?!
- ・ 自主教材について、黒板に大きな地図を貼る、もしくはプロジェクターで拡大した地図を投影するなどの工夫があると良かったです。児童が「先生が今説明している地図記号はどこにあるのだろうか...」と探すのに苦労していたので...

◎ 一言メッセージ

- ・ けじめのついた授業が展開できてました。子ども達の質問にも丁寧に的確に答えてましたね。子ども達と良好な信頼関係が築けていると感じました。
- ・ 自主教材の内容もよく考え、心を込めて準備してました様子がよくわかりました。自主教材がはまりしていると自信を持って授業ができてました。失礼に45分間にはと思います。これからもこの調子で頑張ってくださいね!!

資料2 椋ぼら巡回指導カード

④小学校教諭参加の時代

平成 22 年度より、椋山小学校の校長を教育学部教授が兼務するようになり、ふれあい実習Ⅱ（参加）の指導体制にも変化が起きた。平成 22 年度に校長に就任した宇土泰寛教授の発案により、専任の小学校教諭が学生指導に加わるようになったのである。小学校教諭が学生の授業を参観し、その後にある討論会において、フィードバックを与えてくれるだけでなく、学生の「児童が喧嘩をし、泣いてしまった子がいた場合、どのように対応すればいいか」等の実習中に直面するさまざまな課題に「普段の学校生活においてはこのように対応している」という具体的なアドバイスを与えてくれるようになった。

さらに平成 23 年度から、椋山小学校の土曜教室は「クリプトメリアンサタデースクール」と名称変更し、講座の中身も整理され、小学校の全教諭が輪番制で関わるようになった。ふれあい実習Ⅱ（参加）についても、当番の小学校教諭 2～3 名が学生の授業を見学し、椋ぼら巡回指導カードに記入し、討論会においてフィードバックを与えたり、学生からの質問に答えたりと、学生指導を補佐してくれるようになった。さらに、小学校教諭のアイデアにより、より効果的に児童の学習支援が行えるようにと、クラスを担当する学生とクラス担任を結ぶ「椋ぼら連絡帳」が活動に加わった。椋ぼら連絡帳とは、A4 のファイルで、3 部構成になっている。表紙にはクラスを担当する学生の顔写真と名前が掲載されており、次のページから、授業実習を行うごとに、本時に行った授業の内容、気になる児童のこと、平日のクラスでの授業の進捗状況についての質問などを書くページが続く。最後にはクリアファイルがとじこんであり、学生は順に自習教材をファイルしていく。学生は毎回このノートを提出し、担任の小学校教諭は目を通し、必要に応じてコメントを書き入れる。これまで学生はクラスの学習の進捗状況を把握できず自習教材の準備に苦勞することもあり、また学習タイムで行った学習活動やそこで起きた児童に関する出来事を担任の小学校教諭に報告することがなかったなか、椋ぼら連絡帳の登場は大きな変化であった。学生は担任からのコメントや激励が嬉しく、さらに活動に対する意欲が高まったように感じられる。

(2)「ふれあい実習Ⅱ（参加）」の実施形態

①学生の配置

クリプトメリアンサタデースクールに参加するのは 2 年生から 6 年生の児童であり、全 10 クラスしかないことから、本活動に参加できる学生数はおのずと限られてしまう。そのため、4 月の授業登録時に事前登録を行い、受講生は 30 人以内に絞られる。各クラスに 1 名から 3 名までの学生が割り振られ、担当クラスは 1 年間にわたり固定となる。授業実習は年間 20 回ほど開催されるクリプトメリアンサタデースクールのうち、1 学期と 2 学期に開催される約 15 回を対象に行う。初回の授業の際に、上級学生のなかから役員を 3 名選出し、その役員を中心に、朝の会や討論会を進める。

② 1 日の流れ

ふれあい実習Ⅱ（参加）の一日のスケジュールは以下の通りである。

時間	内容	学生の動きなど
8時20分	集合	・学生控室に集合
8時20分～30分	朝の会	・朝の挨拶 ・出席確認 ・授業担当者や小学校の相ぼら担当者からの諸連絡
8時30分～45分	準備	・授業準備 ・教室への移動 ・教室環境の整備（窓開けや簡単な清掃等）
8時45分～9時30分	授業	・前半に算数ドリルを行う ・後半に自習教材を使った授業を行う ・授業担当者および小学校教諭は授業参観し、相ぼら巡回指導カードに記入
9時30分～9時40分	後片付け	・児童を次の講座へと遅れないように送り出す ・教室の後片付け（窓とカーテン閉め） ・学生控室への移動
9時40分～10時30分	討論会	・授業参観を行った教員からのフィードバック ・学生からの質疑応答 ・「本日の議論点」を決めて全体討論 ・相ぼら報告シートの回収 ・今後の諸連絡
10時30分～11時すぎ	授業終了 後片付け	・相ぼら連絡帳への記入 ・ドリルや自習教材の採点

※次回までに学生は「相ぼら報告シート」の記入と、次回の自習教材の準備を行う。

2. ふれあい実習Ⅱ（参加）での学生の学び

学生は1年間、学習タイムの担任としてクラスを任されることになるため、児童との信頼関係の構築から、効果的な授業運営に至るまで、将来、クラス担任となったときに直面するであろう数々の実践的な課題に直面することになる。これまで討論会や相ぼら報告シートの議論点に頻出した学生たちが直面する課題について、またそれに対して見出された解決策について簡潔にまとめておきたい。

(1) 児童の学習速度の違いへの対応について

「ドリル1ページを10分間で解きましょう」と指示を出した場合、課題の1ページを3分程度で解き切ってしまう児童もいる一方で、指示した10分になってもほんの数題しか解答が終わっていない児童がいるのが現状である。解き終わった児童は時間

をもてあまし、隣の児童とおしゃべりを始めてしまい、まだ課題が途中の児童の邪魔になってしまうこともあり、一方で、問題が解き終わらない児童は、問題に手をつけないまま、さらに悪いことには、その問題の解き方が分からないまま自習教材に進まざるを得ないような状況も生じる。こうした児童の学習速度の違いにいかに対応すべきなのか。討論会での議論や小学校教諭からのアドバイスによって明らかになった解決策は次の2つである。第一に、早く問題が解き終わった児童に対し、チャレンジ問題を準備しておき、終わった段階で課題を与える一方で、問題を進める速度の遅い児童のそばには常にサポート役の学生がつき、集中力が切れないように見守るとともに、つまずきのある問題についてはヒントを出すなどの支援を行う。早く解き終わった児童に渡すチャレンジ問題は、「ご褒美」的要素をもつものに位置づけ、「これができたらすごい！」という発展的で難易度の高い問題を数題準備するか、漢字クイズなどのレクリエーション的要素をもつ課題を準備し、授業終了後に採点する時間を設け、必ず「よくがんばったね」とフィードバックを与える。児童に「早く終わったご褒美」としての意識が共有されないと、「せっかく早く課題を終えたのに、もっとやらされるなんて損」と不平がでることになる。この一連の方法は複数の教員がクラスにいる状況で授業が進められる場合に有効である。第二に、早く問題が解き終わった児童に「先生」カードを渡し、速度の遅い児童の手助けを手伝ってもらうという方法である。この方法はひとりの担任が大勢の児童に対応せざるをえない場合に有効であり、またお互いに教え合うという学びの共同体の思想に合致した方法でもあり、先生役をする児童のセルフエスティームを高め、教える経験によりさらに理解が深まるという利点がある。一方で、常に先生役と指導を受ける「速度の遅い子」が顕在化することにより、児童にレッテルばりをする潜在的効果も持ちうるうえ、児童が児童に教える声が雑音となり、教室が騒然としてしまうという弱点を持つ。

(2) 答え合わせの仕方について

授業の前半に行われるドリルの時間において、学生の採点の仕方には以下の3つのパターンが見られる。第一に、採点係を決め、問題が解けた児童から個別に採点していくというものである。教卓など採点場所を決めて、児童がその場に並ぶ場合と、挙手をして採点係の学生が来てくれるのを待つ場合がある。この方法は、児童に個別に対応でき、間違えた問題の原因をともに探ることができるのが利点である一方、同時に問題が解きあがる児童が多いと、待ち時間が多くなること、早く終わった児童に別の課題を準備しておかないと、ドリルを進める速度の差が児童間において大きくなってしまい、クラス全体の進度がそろわなくなるという難点がある。第二に、問題を解く時間を定め、一斉に答え合わせをする方法である。学生が答えを発表する方法と、挙手制、もしくはランダムな指名により、児童に答えを言わせる方法がありうる。この方法では、クラス全体の進度を一定に保つことが可能になり、児童がよくつまずく

箇所について一斉に解説が可能であるが、特に解説が必要な児童において、一斉での説明ではなかなか理解と定着が難しいという課題がある。第三にドリルを回収して、授業後に採点するというものである。採点する時間を省略できる点が利点であるが、児童がよくつまずく箇所についての解説が、記憶が薄まった次回になってしまうという致命的な欠点がある。

いずれの答え合わせの方法を取るにせよ、一斉授業で授業を進めていく場合、クラス全体の進度をそろえること、そして学習タイムの究極の目的である「理解が乏しい部分の補強を行う」ことを達成できるようにすることが肝要である。学習とは「×を○にする」、すなわちできなかった問題をできるようにすることであり、問題を解いて丸つけをすることで勉強したつもりになるのは間違いである。ドリルを解くことは、自分のできる問題とできない問題を仕分ける作業に過ぎず、できない問題をできるようにするプロセスに至ったときにはじめて学習をしていることになることを児童も指導する学生もしっかりと頭にいれ、「丸つけの先」に重点を置いた指導を行ってほしいものである。前回の授業において児童の理解が十分でなかった問題を、次の授業の冒頭に復習するのもよい工夫である。

(3) 授業におけるけじめのつけ方について

「私語なく、姿勢正しく児童が授業に集中している状態」を作り出すのは、特に授業を担当しはじめて間もない学生にとって難しい課題となる。「去年担当してくれた学生さんの方が良かった」などといって学生を動揺させたり、わざと授業中に逸脱行為をして「この先生はどこまで許してくれるか」を試したりすることは児童にはよくあることである。特に本物の小学校教諭ではない学生が、どこまで厳しく児童に接することができるのか。学生に「優しいお姉さん」を求め、交流を求めてくる児童を前に戸惑う学生も少なくない。授業におけるけじめのつけ方として見出された方法は以下の2点である。1点目は、授業外と授業内の違いを明確にすること。例えば名前の呼び方でも、授業開始前はフレンドリーに名前に「ちゃん」づけで呼んだり、友達同士で普段呼び合っている通称（あだ名）で呼ぶことがあっても、授業中は姓に「さん」を付けて呼び、接する。そして学生も「山田先生」のように、児童に「先生」をつけて呼んでもらうことが必要である。2点目は、最初にクラスのルールを決めること、そしてそれを徹底して守らせることである。クラスのルールを決めた場合は、それを黒板のよく見える場所に掲示しておく。例えば「授業中は私語をしない」ということをルールとして決めたならば、私語がない状態になるまで学生は話を始めない、私語をする児童については常に注意を行い、例外を認めない、などの強い姿勢が大切である。こうして「この先生は決めたことは必ず守る先生なのだ」という信頼感を形成していく。ただし、いつも怖い顔、怖い声を出していると児童は委縮してしまい、教室の雰囲気が悪くなってしまうため、「厳しくするのはみんなのため、よい授業にするため」という目的を明確にするとともに、常に児童に対する愛情を失わないことが大

切である。

(4) 効果的な逸脱修正の方法について

多くの学生が直面するのは、「児童との良好な関係を崩さずに効果的に児童を注意する方法とは」という問題である。討論会では、「静かにしなさい!」「〇〇さん、机の上のものをすぐにしまって!」と声を張り上げるだけが逸脱修正の方法でないということ、それに代わる効果的な方法がいくつか見出された。第一に、それぞれの担任は、独自の「児童の集中を集めるルール」をもっている。例えば「5・4・3・2・1」とカウントダウンする、あるリズムをつけて手をたたき、最後にその手を膝に乗せて姿勢を正す、などである。最初にルール化しておく、児童は条件反射のように教室前方に集中できるようになる。第二に、逸脱した行為を指摘するのではなく、望ましい行為を指摘するという方法である。「1号車さんは正しい姿勢で素敵ですね」「〇〇さんの机の上は整理整頓されていて美しいですね」などと指摘すると、できていない児童も感化されて正しい姿勢になり、机の上の整理を行うことができる。逸脱行為を注意するのと反対に、できていることを褒めるという方法は、クラスの雰囲気をもポジティブな方向に高めることができるうえ、褒められた1号車に属する児童や、お手本として指名された児童のセルフエスティームを高めることができる。特に、高学年になるにしたがい、クラスメイトの前で名指しで注意されることを「恥をかかされた」と嫌がる傾向が高まるため、「正しい姿勢ができていない人は誰でしょう」などの問いかけにより、自らが逸脱行為を修正できるように働きかけるのが有効である。第三に、それでも名指しで注意しなければ逸脱行為が修正されない場面もありえる。そういう場面では、その児童の机にいき、肩を叩いて自覚を促す、もしくは、時間をかけて話さなければならない場合は休み時間に教卓に呼び、一対一で話す、などが必要になる。こうした「個人的に叱る」場面があった場合は、特に当該の児童の行動を注意深く観察し、注意した逸脱行動が改善され、正しい状態になっているときに、「ちゃんとできるようになってえらいね」とフォローアップすることが大切である。そうすることで、「この先生は自分の悪いところを指摘してくれるだけでなく、自分の良いところもちゃんと見ていてくれる」と教員に対する信頼感を高めることができるからである。

(5) 魅力ある自習教材について

算数ドリルのあとに行う自習教材について、どのような教材を準備するかは学生の腕の見せ所である。できうる限り、児童が夢中になって取り組み、学習効果の高い教材を準備すべきである。これまで評価の高かった教材には以下のようなものがある。

- ・テーマを決めて作文させ、それを新聞の読者欄に投稿するという活動。事前にこのような活動を行うことを小学校に報告しておき、新聞掲載が決まったあとは小学校の担任を通じて保護者の許可を得ることが必要である。(全学年対象)
- ・学校周辺の地図を拡大印刷し、北が必ず上になることや縮尺などの地図の決まりや、

地図記号について学ぶ活動。「駅の前にある○に×が入っている記号は何だろう、駅の前には何があったかな」とクイズ形式になっており、児童は楽しみながら取り組んでいた。(3年生の社会科で地図について学ぶため2～3年生に適した活動)。

- 糸・針金・荷造りひもなどさまざまな素材を用いて糸電話を作り、音の伝達について学ぶ実験授業。音は振動となって伝わること、そのため細かい振動を伝えられる細くてやわらかい素材である方が糸電話に適していることを、体験を通して学ぶことができた。さらに糸電話をもつふたり組がふた組、対角線上に立ち、中央で糸と糸を接触させれば、4人で会話することも可能であることを確かめていた。(4～5年生に適した活動)
- 国旗かるたを作り、裏にその国の特徴について記しておき、かるたを取ることできた児童にその特徴について発表してもらう活動。ゲーム感覚で児童は夢中になって取り組めるうえ、繰り返し行うことで、国々の国旗と国の特徴について知ることができる。(かるたの裏に書く国の特徴の内容を工夫すれば、どの学年にも適した活動である)。

以上の例からも分かる通り、クイズ形式・ゲーム形式をもつことで児童を夢中にさせ、結果的に学習が効果的に行われているような教材、また児童が主体的に取り組むことのできる工夫に満ちた教材が優れていると分かる。重要なのは、児童の現在の力を把握して、それよりも多少レベルの高いチャレンジングな教材とすること、そして授業者が授業のねらいを正しく定め、心を込めて教材を作ることである。

(6) 教室における“競争的要素”の取り入れ方について

教室において、「誰が一番に正しい姿勢になれるかな」とか「お片づけが一番先のできる班はどこでしょう」など、児童の競争心を炊きつけて、望ましい教室秩序を導くことはよく用いられる戦略である。しかしながら学習において「プリント、誰が一番はやく終わらせられるかな」という形で用いると、早く終わらせたい、勝ちたいという気持ちが先行し、じっくり腰を落ち着けて問題に取り組み、考えることができなくなり、プロセスはよいから答えを知りたい、答えに繋がるヒントがほしいという雰囲気になってしまう。教室には問題を早く解ける児童もいれば、時間のかかる児童もいることが現実であり、「問題を解くことは競争ではない」「すべての児童が自分のペースでしっかりと取り組むことが大切である」そして「すべての児童が問題の意味を理解し、課題を完了できることが目標である」という根本を忘れず、それを児童と共有することが大切である。学習において競争的要素を安易に用いることには慎重でなければならない。

(7) 児童間のトラブルについて

学生が戸惑うことのひとつに、児童が喧嘩したときや、児童が泣いてしまうとき、どのように対応すればよいかということがある。討論会で指摘されたことは、どうい

う状況でトラブルになったのかを教員が見ていて把握していることが望ましいが、常に見ていられるとは限らないため、そのような場合は、当事者の双方から事情を聞くこと、そばにいて事情を知っている第三者からも事情を聞くことが必要であるということである。そして当事者たちに「どうすれば解決できるか」を考えさせ、なるべく短時間に問題を解決する。児童が感情的になり、すぐには場がおさまらない場合でも、「それでは続きは次の休み時間にお話ししましょう。授業が始まりましたので、席に戻ってくださいね」という形で、一度、クールダウンする時間をもつことが効果的である。多くの場合、時間が経つと児童は機嫌を直しているものだが、「次の休み時間に」と約束した以上、次の休み時間に「もう大丈夫ですか？納得できましたか？」などの声かけを行うことは必要である。

3. 教員養成と現職教育のための“ハイブリッド型教育実習”構築を目指して

本活動が始まって、今年でちょうど10年目となる。本活動のユニークな点は、①多くの学校ボランティアが担任のお手伝いとして教室に入る「T2体験」であるのに対し、1年間固定のクラスで担任体験ができること、②土曜日に開催される学習タイムを用いての実習であるため、平日の授業と重複することなく活動に参加できること、そして学生にとっては、教職員免許法が定める教育実習における授業実習とは異なり、自習教材の準備や授業方法において、さまざまなやり方を試すことのできる、試行錯誤の許される時間であること、③そして、授業後に行われる討論会において、多くの学生が直面する課題について、学生・小学校教諭・大学教員がフラットな関係で議論し、複数の解決策を見出すことができること、の3点を指摘することができる。

そして、本活動が、優れた教員養成の場として機能しているだけでなく、小学校教諭と大学の教員の学びあいの場にもなっていることが重要である。

優れた教員養成の場であることは、上述した通りであるが、さらに付け加えるならば、「栞ばら報告シート」を使い、授業実習をやりっぱなしにせず、反省する時間を持ち、うまくいかない部分は言語化しておいて、今後の課題とすることを積み重ねていることの意味である。学生はこのプロセスのなかで、問題意識を育てており、今後の大学の講義のなかで、またはボランティア等の実践的活動のなかで、自分なりの解決策を見出していくことになる。問題意識のないところに効果的な学習は生みだされないのであり、「理論と実践を両輪として優れた教員養成を行う」という教育学部の基本理念の片輪を担う、重要な実践の場となっているといえる。

さらに重要なのは、小学校教諭と大学の教員の学びあいの場にもなっているという点である。学生が発する問題意識をテーマとして、あるいは、ともに参観した学生の授業をどのように改善すべきかをテーマとして、複数の小学校教諭と大学教員が意見を述べ合う。この時間は非常に刺激的で、若い小学校教諭は「なかなかベテランの先

生方のやり方や、心がけていることを知る機会がないので、とても勉強になった」と喜んでおり、参加全員にとって非常に満足のいく時間となっている。その場にいわせることのできた学生に対する教育的効果は言わずもがな、である。筆者のライフワークのひとつに、教員養成と現職教育のハイブリッド型の「相山の連携」を模索することがあるが、その萌芽的なあり方がここに見られると感じる。

現在、日本の教員養成は岐路に立っている。教職という職業は、新卒新任であったとしても1年目からベテランの教員と同じように「正規の教員」として教壇に立たなければならない。新任教員を迎える現場からは、「大学がもっと実践的な教員養成を行い、1年目から教員として必要な力をもつ新人を送ってほしい」という声が聞かれる一方、大学からは「大学がすべきことは、教員として必要な幅広い教養や教職に必要な知識を与えることであり、現場で必要な実戦力は現場で指導してほしい」という声が聞かれる。このような一種の責任の押し付け合いでは、望ましい教員養成は成り立たないであろう。今、求められるのは、大学と現場が連携して、真に教員として力のつく教員養成の仕組みを見出すことである。そしてそのプロセスのなかで、教員養成の場となる現場においてもメリットが生じること、例えば、現場の教員の力量形成に役立つ機会があったり、現場の教育実践の質が向上したりという副産物があるような互酬性のある仕組みづくりを構築することが望まれる。

今後も本活動を“教員養成と現職教育のハイブリッド型教育実習”に育てていくことが筆者の目標である。

■注

- i 相山小学校が土曜日に開催する特別教室のこと。従来は「土曜教室」と呼ばれていたが、平成23年度より、現在の「クリプトメリアンサタデースクール」に名称変更し、内容も刷新された。伝統・アート・スポーツ・コミュニケーション・サイエンスを柱とし、造形絵画、パソコン、囲碁、和太鼓、長唄三味線、フラダンス、サイエンス、折り紙、フランス語、サッカーの講座が開かれ、2年生から6年生の児童が自分の興味関心にあわせて、2つの講座を選択し、参加している。年間20回程度。3月にはここで学習したことを発表する「学習発表会」が予定されている。1日のスケジュールは8時45分～9時30分が「学習タイム」、9時40分～10時30分が「講座1」、10時40分～11時30分が「講座2」となっている。